〔東京家政大学研究紀要　第34集 (1), p.141～149, 1994〕

英雄行動の裏側に潜むもの
――『老人と海』小論――

新　井　哲　男

(平成5年9月30日受理)

Something Lurking behind the Heroic Actions

Tetsuo ARAI

(Received September 30, 1993)

1

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) の『老人と海』(*The Old Man and the Sea*) は，1952年9月1日号の雑誌『ライフ』(*Life*) に掲載され，1週間後の9月8日，単行本としてスクリブナーズ社 (Charles Scribner's Sons) から出版された．この作品は，出版されるとすぐに好評を博し[1]，2年後の1954年にヘミングウェイがノーベル文学賞を授与されるもととなった．以来，この作品は，高い人気を保ち続け，作家の死後30年余を経た今日でもその人気は衰えを知らない．では，それだけの人気を保ち続けている秘密はどこにあるのだろうか．

一つはヘミングウェイ独特の文体にある．彼は，1925年3月20日付けの父親に宛てた手紙で次のように述べている．

> You see I'm trying in all my stories to get the feeling of the actual life across-not to just depict life-or criticize it-but to actually make it alive. So that when you have read something by me you actually experience the thing.[2]

ただ単に生活を描いたり，批評したりするのではなく，実際にそれが生きたものになるように，つまり読者が物事を経験するように書くというヘミングウェイは，実に細かく対象を見つめ，感情をまじえず，淡々と記す．例えば，「インディアン部落」('Indian Camp') で，インディアンの夫が自殺した場面は，実に凄惨であるが，ヘミングウェイは，ここで「凄惨，凄絶，凄い，酷い，痛ましい，耐えられない」という言葉は一切使わず，次のように現場をありのままに記している．医者であるニックの父は，2段ベッドの下の段で，インディアンの妻に帝王切開の手術を施し，無事に男の子を出産させる．その後，彼は，意気揚揚と，足の怪我のため上の段に寝ているインディアンの夫を見舞う．

> He [Nick's father] pulled back the blanket from the Indian's head. His hand came away wet. He mounted on the edge of the lower bunk with the lamp in one hand and looked in. The Indian lay with his face toward the wall. His throat had been cut from ear to ear. The blood had flowed down into a pool where his body sagged the bunk. His head rested on his left arm. The open razor lay, edge up, in the blankets.[3] (p.19)

「凄惨な」という言葉の代わりに血の流れ込む「血だまり (pool)」や「刃が上を向いた (edge up)」ままで置かれている「むきだしの (open)」剃刀という語が，凄惨な現場を読者に伝えている．まさに読者は，その現場の説明を受けるのではなく，体験するのである．

描写ではなく，体験を通して読者に感情を伝えようとする努力は，『老人と海』にも受け継がれている．『老人と海』で，この文体は，老人の確たる決意，躍動，興奮を伝えるのに大いに役立っている．

例えば，老人の鉤針に魚がかからなくなって85日目の朝，老人が一人で海へ出ていく場面は次のように記され

英語英文学科　第1米文学研究室

ている.

> The old man knew he was going far out and he left the smell of the land behind and rowed out into the clean early morning smell of the ocean.[4] (p.28)

朝の海の澄んだ冷たい空気と共に，老人の清々しい気持ちが伝わってくる．彼は，今日こそはと決意しているのだ．老人の海にかける決意は，老人の気持ちをいかに分析し，解釈し，説明し，描写したところで，このように明確には伝わってこない．読者も，老人と共に，澄んだ朝の海の空気を吸うことによって，はじめて体感できるのである．

もう1つ例をあげてみよう．大魚がはじめて老人の前に姿を見せたときの場面である．

> The line rose slowly and steadily and then the surface of the ocean bulged ahead of the boat and the fish came out. He came out unendingly and water poured from his sides. He was bright in the sun and his head and back were dark purple and in the sun the stripes on his sides showed wide and a light lavender. His sword was as long as a baseball bat and tapered like a rapier and he rose his full length from the water and then re-entered it, smoothly, like a diver and the old man saw the great scythe-blade of his tail go under and the line commenced to race out. (pp.62－63)

高村勝治によれば，「紫は帝王の色であり，このあたりの描写はシンボリカルな要素が加えられている[5]」とのことであるが，ここの描写は，実に正確で，細かい．何か大きなものが現れる兆しとして「膨れあがる (bulge)」海，「延々と (unendingly)」現れる魚，「どっと流れ落ちる (pour)」水，これらの細かい描写は，読者の臨場感を高めるのに大いに役立っている．そしてまた，高村の言葉を待つまでもなく，太陽の光のなかで光り輝き，戦いをしているにもかかわらず，慌てふためき，狼狽することなく，悠然と構える魚の姿は，魚の大きさを伝えるだけでなく，その偉大さをも読者に知らしめ，また，魚を目にしたときの老人の感情を伝えることになる．

ヘミングウェイは，『パリ・レヴュー』(*The Paris Review*) のインタヴューに答え，「ある人物を描こうとすると，写真のように平板になり，私の視点からみると失敗である．実際に自分の知っていることから人物を作り出せば，たいへんな厚みができる (If you describe someone, it is flat, as a photograph is, and from my standpoint a failure. If you make him up from what you know, there should be all the dimensions.)[6]」と語っているが，彼は，自己の体験を生かしながら，生きている社会をそっくりそのまま読者の前に現出することに心を砕いた．

『老人と海』の魅力は，読者への体験を重んじる上記のような文体によるものばかりではない．老人対大魚マカジキの対決という構図を通して，ヘミングウェイは，人間対自然の戦いを描く．老人が海上で最初に目にするのは，小さな飛び魚を餌にしようと，空からは軍艦鳥が，海からはシイラが追うという弱肉強食を基本とした自然界の縮図である．そしてこのシイラを追ってもっと大きな魚がこの周囲にはいるに違いないと，老人は考える．老人がめざす魚は，この自然界の弱肉強食の梯子を昇った最上段にいる魚である．しかし，いざ，自然界の最上段にいる魚を相手にしたとき，老人の自信は揺らぐ．老人は，「こんなに強い魚にあったことはないし，こんなに変わった行動をとる魚にあったことはない (Never have I had such a strong fish nor one who acted so strangely.)」(p.48) と考える．戦いが長引くにつれ，彼は，次第に，魚が相手なのではなく，大自然が相手なのだと認識していく．「人間にはどんなことができ，人間がどんなことに耐えられるかを見せてやる (I will show him what a man can do and what a man endures.)」(p.66) と言い，「人間は大きな魚や獣に比べれば大したことはない (Man is not much beside the great birds and beasts.)」(p.68) と言う．そしてついには，老人は，大魚に向い「兄弟 (brother)」と呼びかけ，「どちらがどちらを殺そうともかまわん (I do not care who kills who.)」(p.92) とまで言う．

老人の大自然の力に対する認識の変化は，帰港後，「俺は敗けた (They beat me.)」(p.124) と少年に語り，出港前には，他人の子供だからと頑固に拒否していた老人の舟への少年の同行を，帰港後は素直に認めるようになり，そしてまた，「海はとても大きく，舟は小さく見

つけづらい（The ocean is very big and a skiff is small and hard to see.）」（P.124）と言う言葉となって表れている．大自然の大きさ，それに比した人間の小ささ，最後は敗北するものの巨大な大自然を相手に懸命に立ち向かう人間の姿，老人と魚との戦いを通して一層深まる老人と少年との繋がり，このようなものに魅かれて，読者は『老人と海』を読む．

2

さて，『老人と海』で，老人は，広い海へ出，誰も行ったことのない遠くまで舟を出し，そこで誰も釣ったことのない大魚を釣ろうと考えるが，老人はなぜ海へ出るのだろうか．

確かに，アメリカ人の多くは，海を渡ってきた人たちを祖先にもち，アパラチア山脈を越え，中西部の大平原を越え，ゴールド・ラッシュ時代にはロッキー山脈を越えて，西海岸にまでたどりついた人たちを祖先にもつ．彼らは，フロンティア・スピリットをもち，常に前へ前へと進んできた．そして，現代では，地球を出て，宇宙へ目を向けている．アメリカ文学作品でも，メルヴィル（Herman Melville）は『白鯨』（*Moby-Dick*）で世界の海をかけ巡り，ホイットマン（Walt Whitman）は『草の葉』（*Leaves of Grass*）中の「僕自身の歌」（'Song of Myself'）45節で，万物の長たる神の住む宇宙空間の広がりを歌った．

このように，アメリカ人の血の中に，フロンティア・スピリットが宿り，前へ前へと進む気持があることは十分に理解しても，それだけで老人が「誰もが行けない遠くまで，名実ともに立派な魚を取りに出かける（My choice was to go there to find him beyond all people. Beyond all people in the world.）」（p.50）理由とすることはできない．作品中で老人は，「自分は漁師として生まれついたから釣りをするのだ（Perhaps I should not have been a fisherman, he thought. But that was the thing that I was born for.）」（p.50）と述べているが，先に引用した「陸地の臭いを後に残し，澄んだ早朝の海の臭いの中へと漕ぎだしていった」という作品中の記述は，先の老人の言葉だけでは説明しきれないものがあることをうかがわせる．「陸地の臭い」と「澄んだ早朝の海の臭い」が対比されていることを考えると，この陸地の臭いはかぐわしい臭いではあるまい．どろどろとした，よどんだ臭いであるかもしれない．

かつてヘミングウェイは，「心の二つある大きな川」（'Big Two-Hearted River'）で，少年時代に過ごした清々しい気分を与えてくれる森の中に主人公ニックを配置しながら，いつかは入っていかなければならないと自覚してはいるものの，今は「森の中の沼地（swamp）には入っていきたくない」という言葉をニックに繰り返し述べさせた．

この沼地の解釈について，フィリップ・ヤング（Philip Young）は，「ニックにとっては心地よくないが，（そこに足を踏み入れるまで）しばらくの間は，何か得体の知れないものという含みがある（… this region has some connotation for him that is unpleasant but enigmatic, for the time being....）[7]」と述べ，更に，「その沼地は，『良い場所』であるテントとは異なり，良くない場所なのだ（… the swamp, which unlike the tent, "the good place," is the bad place.）」（p.47）と述べている．また，瀧川元男も『沼地』は，人生の『悪と暴虐』であり[8]」と述べているが，ここの解釈で述べられたものと変わらぬ社会が『老人と海』にもあり，「沼地」にみられるよどんだ社会の臭いが，陸地では芬々としているのではあるまいか．

陸地には，毎日毎日釣れないで帰ってくる老人を嘲笑し，冷たい視線を投げかける者たちがいる．しかし，同時に，老人の心を察し，暖かく見守ってくれる漁師もいる．老人はこの村の人たちが嫌いではない．老人は，村の人たちのことを気づかい，「村の人たちが盗みたいという気持を起こすことのないように，釣り道具を家に持ち帰る（… though he was quite sure no local people would steal from him, the old man thought that a gaff and a harpoon were needless temptations to leave in a boat.）」（p.15）．嫌いな人を相手にしては，このような配慮はなされるはずがない．老人は村の人たちが好きだからこそ，このような気づかいをし，あたたかい態度を取るのである．そして，老人は，自分を嘲笑する若い漁師たちに対しては，怒ることなく，彼らを超越し，相手にしない．彼は，海のことを男扱いする者たちと女扱いする者たちを区別し，次のように述べる．

> He always thought of the sea as *la mar* which is what people call her in Spanish when they love her. Sometimes those who love her say bad things of her but they are always said as

though she were a woman. Some of the younger fishermen, those who used buoys as floats for their lines and had motorboats, bought when the shark livers had brought much money, spoke of her as *el mar* which is masculine. They spoke of her as a contestant or a place or even an enemy. But the old man always thought of her as feminine and as something that gave or withheld great favours, and if she did wild or wicked things it was because she could not help them. The moon affects her as it does a woman, he thought. (pp.29－30)

では，老人が陸地の臭いと共に後に残してきたものは何なのか．そのヒントともいえるものが，夢という形で記されている．彼は，85日目の漁に出かける前の晩，自分が若かった頃に行ったアフリカの夢をみる．

He was asleep in a short time and he dreamed of Africa when he was a boy and the long golden beaches and the white beaches, so white they hurt your eyes, and the high capes and the great brown mountains. He lived along that coast now every night and in his dreams he heard the surf roar and saw the native boats come riding through it. He smelled the tar and oakum of the deck as he slept and he smelled the smell of Africa that the land breeze brought at morning. (pp.24－25)

作者は，なぜ「白い浜辺（the white beaches)」としただけでは足りず，次に「目が痛いほどの白さだ（so white they hurt your eyes)」と付け加えて挿入したのだろうか．明らかに，読者の関心をひく書き方だ．白い浜辺，目が痛いほどの白さ，この表現は，読者に「キリマンジャロの雪」('The Snows of Kilimanjaro')の雪の白さを想起させる．

「キリマンジャロの雪」では，巻頭に，豹についての短い話が置かれている．つまり，解釈をまじえて要約すれば，「人並み外れて勇敢な豹（『老人と海』で，老人や大魚に対して使われている表現を使えば，"strange"な豹ということになろうか）が，アフリカの最高峰キリマンジャロ山頂近くに倒れている．キリマンジャロ山頂は，土地の人の間では神の館と呼ばれている．誰もこんな所にまで豹がやってくるとは考えてもいないし，今までにやってきた豹もいない．しかし，この豹は，神の館を求めてやってきて，山頂近くで，力尽きて倒れてしまったのだ．しかし，その豹の屍は，キリマンジャロ山頂の万年雪のために決して腐ることはない．」というものだ．「キリマンジャロの雪」の作品の最後で，壊疽にかかり死にかけている主人公ハリー（Harry）は，夢の中，自分を看護する女のもとを離れ，1人救援機にのる．機は激しい嵐に襲われるが，滝のような雨の中を抜けると，ハリーの目に「太陽の光を浴びて信じられないほど白い(unbelievably white in the sun)[9]」キリマンジャロ山頂が見えてくる．

『老人と海』に記されている浜辺の白さは，「目が痛いほど白い」という言葉が添えられることにより，神々しさ，まぶしさ，新鮮さ，清々しさ等の意味あいが付加されることになる．そして「キリマジャロの雪」を読んだことのある読者には，キリマンジャロ山頂の雪と豹の姿を想起させる．もちろん，「(アフリカの）白い浜辺」と記せばそれですむところであるから，作者は読者を意識し，意図的にこの表現を挿入したといえる．

視覚に続いては，嗅覚である．甲板のタールとまいはだの臭い，そしてアフリカの臭い．これらの臭いは，翌朝，海に出た時の澄んだ海の臭いにつながる．つまり，老人は，夢の中で，真っ白な浜辺を見，甲板の臭いを嗅ぎ，アフリカの臭いを嗅ぎながら，現実を忘れ，心地よく，1人自分だけの世界で生きるのである．

この後，作者は次のように記す．

He no longer dreamed of storms, nor of women, nor of great occurrences, nor of great fish, nor fights, nor contests of strength, nor of his wife. He only dreamed of places now and of the lions on the beach. They played like young cats in the dusk and he loved them as he loved the boy. He never dreamed about the boy. (p.25)

嵐，女，大事件，大魚，戦い，力較べ，妻，すべて現実である．彼は，現実は夢見ない．先に，アフリカの白い浜辺など，心地よく夢をみる老人の姿を作者は描いた

が，彼はなぜ夢見ないもののことを記したのか．見る夢の内容を記すことはできても，見ない夢は数限りない．その中で，なぜこれらの項目を作家は選んだのか．しかも“no longer”という表現が使われている．“no longer”とは，昔は見たが，今は見ないということだ．つまり，老人は，昔はこのようなことに大いに関係していたが，今は関係しないようにしていると言っているかのようだ．海上で嵐にあえば，漁師にとっては辛いことになる．大自然の起こす風と雨を相手にすさまじい戦いをしなければならなくなる．幸い，翌朝海に出てから大魚との戦いを繰り広げる間，天候はすべて良好だ．作品中では，「この分ではよい天気が続くだろう」と天候のことを気にかける老人の言葉が，繰り返し出てくる．

また，嵐，大魚，戦い，力較べでは，すべて力が関係する．力較べとは，後で老人が回想していることから判断すると，腕相撲のことかもしれない．かつて老人は，浜で１番の強者と言われた黒人と腕相撲をしたことがあり，１夜を徹した戦いで彼を破ったことがあった．老人は，大魚との戦いの最中にこの事件を思い出すのだが，作品には，「自分に自信をつけさせるために思い出した（As the sun set he remembered, *to give himself more confidence*, the time in the tavern at Casablanca when he had played the hand game with the great negro from Cienfuegos who was the strongest man on the docks.)」(pp.68−69)（イタリック体は筆者）とある．つまり，老人は大魚との戦いにおいて，若かった頃の自分の力を思い出し，自分に自信と勇気を与えている．

現実は，力が大きくものを言う．しかし彼は今は年老いており，とても昔の力は出ない．昔の若かった頃の力を回顧しながらも，老人は今は技を大事にする．“no longer”という言葉に表されているように，老人もかつては，力ずくで勝負していたのだろう．しかし，今ではそうではない．先に引用した“la mar”と“el mar”の違いに見られるように，力ずくの釣り，力ずくの勝負を嫌う．釣れない日が何日続こうとも耐え，「誰よりも綱を真っすぐに垂らす（He kept them straighter than anyone did,....」(p.32) ことに心を配る．

老人が，もはや夢を見ないものとしてあげた「女」や「妻」はどうであろうか．この世の中に女と男がいるかぎり，「女」は現実である．しかし，文の最後の締め括りとして“nor of his wife”と置かれていることから判断すると，「妻」にかなり力点が置かれている．「女」や「妻」も力と関係するのか．理由はともあれ，少くとも，今の老人にとっては，避けたいものなのか．釣りの話だからとはいえ，『老人と海』には，作品の最後で，老人が戦った相手を鮫と取り違える不心得な旅の者を除いて，女性は１人も登場しない．妻の代わりに，妻のように細かい所まで心を配り，老人の面倒を見る少年はいるものの，妻は登場しない．なぜだろうか．老人の妻に関しては，１度だけ記述がある．

> On the brown walls of the flattened, overlapping leaves of the sturdy fibered *guano* there was a picture in color of the Sacred Heart of Jesus and another of the Virgin of Cobre. These were relics of his wife. Once there had been a tinted photograph of his wife on the wall but he had taken it down because it made him too lonely to see it and it was on the shelf in the corner under his clean shirt. (pp.15−16)

一般論で言えば，亡くなった人の写真は，亡くなった人を偲び，見える場所に飾っておくのが普通である．事実，老人も最初はそうしていた．しかし，今では，見ると寂しくなるという理由で，老人は写真をはずしている．しかも，外された写真は老人のきれいなシャツの下に置かれている．作者はなぜ，「写真を外した」だけでとどめず，「彼のきれいなシャツの下」に置いたと記したのか．老人の分身とも言え，老人の肌を感じさせる老人のシャツと，文字通り妻の形見の品で分身でもある妻の写真とが触れ合う形で置かれている．妻を作品から排除しながらも，老人と妻とを間接的に触れ合わせている作家の複雑な感情が読み取れる．

老人の妻についての記述は，作品中上記のみであるが，作品には，男女の仲を暗示する描写がいくらかある．老人は海上で綱を垂らしながら，最も悲しい出来事として，かつて番いで泳いでいたマカジキのメスを釣り上げた時のことを思い出す．オスは，メスに最初に食事を与えるので，老人が釣り上げた魚はメスだった．オスは老人の綱を切ろうとして，必死になってメスのまわりをあばれまわった．しかし，老人がメスを釣り上げ，舟の中に収めてしまうと，オスは空中高く飛び上がり，メスのいる

場所を確認し，あきらめて水中深く沈んでいった．老人は，この出来事を今まで釣りをしたなかで最も悲しかった事の一つとして思い出す．老人はもちろんのこと，このようなエピソードを挿入した作家の心のどこかにも，魚の世界のオスとメスの睦まじさ，愛情の深さに多少羨みを覚える気持があったのかもしれない．

また，海上での海のうねりの様子からも，男女の仲がうかがわれる．

> Just before it was dark, as they passed a great island of Sargasso weed that heaved and swung in the light sea as though the ocean were making love with something under a yellow blanket,.... (p.72)

老人は確かに1人で海に出てはいるのだが，海上で，彼は時々，現実世界の女性への思いを頭のどこかに浮かべている．現に老人は，先にも引用したように，海を女性として捉えている．老人は，海を女性代名詞“she”で受け，「彼女はやさしく，とても美しい．しかし彼女はとても残酷になることもある，そしてそれは全く突然にやってくる……（She is kind and very beautiful. But she can be so cruel and it comes so suddenly....」(p.29)と考える．もちろん英語で“she”は（上記引用文中には記してないが）前文中の“the ocean”を受けることは明白である．しかし，この文のすぐ後に，先に引用した“la mar”“el mar”の文が続くことを考えると，単純に海のことを述べただけとは考えにくい．しかも，先に引用した文の最後には，「月が（人間の）女性に影響を与えるように，海に影響を与えている（The moon affects her as it does a woman.)」(p.30)と（人間の）女性と海とを並列において記している．

『パリ・レヴュー』のインタヴューに答え，「最もよく書けるのは，確かに恋愛をしている時だ（the best writing is certainly when you are in love)[10]」と語り，実際，『老人と海』を書いていた時にも，イタリア人娘アドリアーナ（Adriana Ivancich）と恋をしていたことが知られているが，ヘミングウェイの描く老人の心にも女性に対する複雑な心理が投影されている．

さて，上述した海を女性にたとえた言葉は，16年前に書かれた「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」（‘The Short Happy Life of Francis Macomber’）で，狩猟案内人のウィルソン（Wilson）が考える「アメリカ人女性は，この上なく難しく，残酷で，男を食い物にし，それでいて全く魅力的だ（They [American women] are, he [Wilson] thought, the hardest in the world; the hardest, the cruelest, the most predatory and the most attractive....)[11]」(p.126)という言葉を想起させる．「フランシス・マコーマの短い幸福な生涯」では，臆病なるが故に妻から蔑まれていたマコーマーが，真の勇気を得た瞬間に，皮肉にも水牛を狙って射った妻の銃弾に当たり，死んでしまう．今，真の勇気を得て，大魚と対峙している老人に，妻はいない．

ヘミングウェイ作品中の妻・母親像を，簡単に眺めてみよう．「医者と医者の妻」（‘The Doctor and the Doctor’s Wife’）や「兵士の故郷」（‘Soldier’s Home’）では，医者の妻やクレブス（Krebs）の母が宗教心厚く，その宗教心が夫である医者や息子のクレブスを悩ませている．「医者と医者の妻」では，医者は妻のいる家を離れ，森に入り，清々しい気持になる．「兵士の故郷」では，クレブスは，近いうちにこの家を出ていこうと決心する．2人とも，宗教心厚く，口うるさい女性の元を離れていくことになるが，なぜか『老人と海』でも，老人に残された唯一の妻の形見の品（2枚の宗教画）から，老人の妻が宗教心厚い女性であったことが，暗示されている．

「医者と医者の妻」では医者が，「兵士の故郷」ではクレブスが家を出ていくことになるが，現場を離れていくのは医者とクレブスばかりではない．ヘミングウェイの最初の短編集『我らの時代に』(*In our Time*）の冒頭に置かれた作品「インディアン部落」では，インディアン女性のお産に際し，部落の年配の女性たちは，皆手伝いに来ているが，男たちはわざわざ道を上がり，「妊婦のたてる叫び声の聞こえない所まで行って，煙草を吸っている．(The men had moved off up the road to sit in the dark and smoke *out of range of the noise she made.*)」(p.16)（イタリック体は筆者）「妊婦のたてる叫び声の聞こえない所で」と記されていることから，男たちが，その声を嫌い，避難していることがわかる．「国境の雪」（‘Cross-Country Snow’）では，妻の元を離れ，今はスキーを楽しんでいるが，お産を間近に控えた妻の元へ帰らなければならないことを考え，ふさぎこむニックの姿が描かれる．

『我らの時代に』の最後に置かれた作品「心の二つあ

る大きな川」では，心に傷を負ったニックが，少年時代に過ごした森に来て，澄んだ川のほとりで鱒釣りをし，心を和らげ，傷をいやしている．

現実社会からの逃避という点では，長編『武器よさらば』も同様である．戦争の汚い面を見たヘンリーは，1人戦線を離れ，単独講和をする．そして，憲兵の追撃を逃れるため，彼は，嵐の晩，愛するキャサリンと共に湖を渡り，スイスへと逃れる．

「キリマンジェロの雪」で主人公ハリーは，作家としての才能を蘇らせるためにアフリカの奥地へやってきたが，ほんの少しの掻き傷の手当てを誤ったために，右脚が壊疽になり，死の床についている．彼は，自分を一心に看護しているとも，逆に自分が動けないだけに支配しているとも取れる（作品には"… this woman, … who loved him dearly as a writer, as a man, as a companion and *as a proud possession*; "(p.11)（イタリック体は筆者）と記されている）女性から逃れて，夢の中ではあるが，救援機に乗り，先にも述べた純白に輝くキリマンジャロの山頂を目指す．

短編「殺し屋」（'The Killers'）でも，社会の醜悪な面を見たニックが「(そのようなことを）考えるだけで耐えられない」という言葉を残し，町を出ていくが，ヘミングウェイには，醜悪な現実から逃れ，時には死の世界へ行き，時には森の中やどこか他の場所へ移動する傾向があるように思われる．

3

上に述べてきたこの作家の従来の傾向を見る時，晩年の作品『老人と海』もこの流れの中にあるのではないかと推測される．老人は，自らも「変わった老人（a strange old man)」と称しているように，とても現実にいる人間とは思えない強い精神力と卓越した技術をもった漁師である．彼は，大きな戦いをするために海に出かけていくが，海上での戦いは，一種の老人の夢であり，その夢の背後には，先にも説明した，もはや見なくなった夢の存在がある．つまり，老人は，現実を背後に残し，夢の世界へと入っていくのである．

この作品は，「老人はライオンの夢を見ていた（The old man was dreaming about the lions.)」(p.127) という文で終っている．ライオンの夢についてカーロス・ベイカー（Carlos Baker）は，「若さ，力，不滅性をも想起させる(… the playing lions, which carry the associations of youth, strength, and even immortality.)[12]」と述べている．ライオンに関しては，「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」のライオン狩りの場面が想い起こされる．頭半分吹き飛ばされても，立ち上り，銃口に向かってくるライオンについて，真新しい狩猟服を着た初心者のマコーマーには，ライオンが何を考え，どう感じているのか全くわからない．彼には，何がライオンにそのような行動を取らせるのかわからないのだ．一方，ベテランの狩猟家ウィルソンは，「これについて何かわかっていた．そして，彼は，『全く素晴らしいライオンだ』と言ってその気持を表した．(Wilson knew something about it and only expressed it by saying, "Damned fine lion,"....)」(p.139)

16年前，素人のマコーマーにはわからなくて，熟練した狩猟家のウィルソンにはわかったライオンの偉大さが，今，老人にはわかり，老人はライオンに自分の身を寄せて夢を見る．『老人と海』は，確かに，ただ1人広大な海に出かけ，大魚を相手に死闘を繰り広げる老人の英雄物語であるが，醜悪なる現実からの逃避願望という一面をも併せもった作品と言ってもよいであろう．

注

1）バーニス・カート（Bernice Kert）は，『老人と海』が発表された時の様子を次のように記している．

"Response to the book was tremendous. Five million copies of *Life* were sold within forty-eight hours."(*The Hemingway Women*, New York・London: W. W. Norton & Company, 1983, p.466.)

2）Carlos Baker, ed., *Ernest Hemingway Selected Letters 1917−1961* (New York: Charles Scribner's Sons, 1981), p.153.

3）Ernest Hemingway, 'Indian Camp,' *In Our Time* (New York: Charles Scribner's Sons, 1925), p.19. 以下，この作品からの引用および頁数はこの版による．

4）Ernest Hemingway, *The Old Man and the Sea* (New York: Charles Scribner's Sons, 1952), p. 28. 以下，この作品からの引用および頁数はこの版による．

5）高村勝治，*Notes on The Old Man and the Sea* (東京：英光社，1970)，pp.46−47.

6) George Plimpton, 'The Art of Fiction : Ernest Hemingway,' *Conversations with Ernest Hemingway,* Matthew J. Bruccoli, ed., (Jackson and London : University Press of Mississippi, 1986), p.124.

7) Philip Young, *Ernest Hemingway: A Reconsideration* (New York : Harcourt, Brace & World, Inc., 1966), p.47.

8) 瀧川元男,『ヘミングウェイ再考』, (東京 : 南雲堂, 1792), pp.41－42.

9) Ernest Hemingway, 'The Snows of Kilimanjaro, '*The Snows of Kilimanjaro and Other Stories* (New York : Charles Scribner's Sons, 1964), p.27. 以下, この作品からの引用および頁数はこの版による.

10) George Plimpton, 'The Art of Fiction : Ernest Hemingway' *Conversations with Ernest Hemingway,* Matthew J. Bruccoli, ed., p.114.

11) Ernest Hemingway, 'The Short Happy Life of Francis Macomber,' *The Snows of Kilimanjaro and Other Stories* (New York : Charles Scribner's Sons, 1964), p.126. 以下, この作品からの引用および頁数はこの版による.

12) Carlos Baker, *Hemingway: The Writer As Artist* (New Jersey : Princeton University Press, 1972), p.311.

参考文献

石一郎編　『ヘミングウェイの世界』荒地出版社 1970

今村楯夫　『ヘミングウェイ－喪失から辺境を求めて』冬樹社 1979

今村楯夫　『ヘミングウェイと猫と女たち』新潮社 1990

嶋　忠正　『ヘミングウェイの世界』北星堂書店 1975

高村勝治　『ヘミングウェイ』研究社出版 1971

高村勝治　*Notes on The Old Man and the Sea* 英光社 1970

瀧川元男　『ヘミングウェイ再考』南雲堂 1792

Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life Story.* London : Collins, 1969.

——. *Hemingway.: The Writer As Artist.* New Jersey : Princeton University Press, 1972.

——, ed., *Ernest Hemingway Selected Letters* 1917－1961. New York: Charles Scribner's Sons, 1981.

Benson, Jackson J., ed. *The Short Stories of Ernest Hemingway: Critical Essays.* Durham, North Carolina : Duke University Press, 1975.

Gladstein, Mimi Reisel. *The Indestructible Women in Faulkner, Hemingway, and Steinbeck.* Ann Arbor ／ London : U・M・I Research Press, 1986.

Gurko, Leo. *Ernest Hemingway and the Pursuit of Heroism.* New York : Thomas Y. Crowell Company, 1969.

Kert, Bernice. *The Hemingway Women.* New York・London : W. W. Norton & Company, 1983.

McCaffery, John K. M., ed. *Ernest Hemingway: The Man and his Work.* New York : Cooper Square Publishers, Inc., 1969.

Melville, Herman. *Moby-Dick.* New York : W. W. Norton & Company, 1967.

Plimpton, George. 'The Art of Fiction : Ernest Hemingway,' *Conversations with Ernest Hemingway.* Matthew J. Bruccoli, ed.. Jackson and London : University Press of Mississippi, 1986.

Whitman, Walt. *Leaves of Grass.* New York and London : G. P. Putnam's Sons, 1902.

Young, Philip. *Ernest Hemingway: A Reconsideration.* New York : Harcourt, Brace & World, Inc., 1966.

Something Lurking behind the Heroic Actions
A Study of *The Old Man and the Sea*

Synopsis

The great popularity of *The Old Man and the Sea* has much to do with its literary style and the protagonist's way of thinking about life and responding to it. The old man has gone eighty-four days without catching a fish, but remains undefeated. He still thinks he will catch a fish beyond the dreams of all the other fishermen in the world. He undergoes a severe ordeal and competes with a big fish in endurance. His battle against the fish becomes man's battle against nature. The old man fights well even though *as* man he is destined to lose in the end.

The purpose of the old man's journey, however, is to do more than catch a fish. The ominiscient narrator says, "he [the old man] left the smell of the land behind and rowed out into the clean early morning smell of the ocean." The journey involves leaving the land, for which we can read, leaving the *earth*. The ambiguity of this expressions reflects the innocent lack of clarity in the old man's mind, somewhere in the back of which is his desire to leave the real world. This paper offers an analysis of this point of view with frequent reference to relevant parts of other Hemingway stories and novels.